

憩いの私設図書館

若松の山口さん 開館2年

放課後になると、家にランドセルを置いた子どもたちが一目散に駆けつける場所がある。自宅の一部を開放して絵本を貸し出す会津若松市の私設図書館「絵本文庫 やまぼうし」。開館から2年が経過し、近所の子どもや大人が集まる憩いの場になっている。オーナーの山口元子さん(64)は「絵本が好きで、サロンのような場所を求めている人たちの居場所になっていけばうれしい」と話す。



【絵本文庫 やまぼうし】
▽住所＝会津若松市東千石2の2の15
▽開館日＝水曜日午後1時半～同4時半、土曜日午前9時～正午
▽問い合わせ＝山口さん
(電話080・1832・6700)



装した。23年3月に前川さんが文庫を閉めると約6千冊の絵本を移動させ、同年5月に第2のやまぼうしを刊をそろえる。未就学児を連れた保護者の利用も多いが、絵本好きの大人も集まる。「絵本はみ終わった時が返す時。この決まりは前身のやまぼうしから続いている。忙しい子育てをしていた時、返却日に慌てて図書館に返しつた時代を経験したから、緩いのがいい」という山口さんの思いもある。飲見つめた。(安達加藤)

「久しぶり」「一緒に交さって遊ぼう」。絵本に開かれた空間に子どもたちの明るい声が響く。お気に入りの一冊を見つけて読む、お絵描きやトランプで遊ぶ、育休中のママ友同士が息をつく。訪れる目的はそれぞれで、ここで出会った利用者が自由なひとときを過ごす。そんな雰囲気は「自然で良い」と山口さんは目を細める。県立高校で司書経験があるやまぼうしのスタッフによると、自宅を開放する文庫は昭和の時代には全国的にも珍しくなかった。会津にも40カ所以上あったとされるが、時代の流れとともに姿を消しつつある。やまぼうしの始まりは2003年。中学校の国語教師だった前川圭さんが定年退職を機に自宅に文庫を開き、長年の夢をかなえた。多くの人が集まるようになると市中心部に家を買って、買ためていた絵本を置いて20年間、地域の憩いの場を提供した。山口さんは利用者の一人だった。当時、小学校の支援員として児童に読ませる絵本を借りに訪れていた。絵本が好きで、前川さんと同じように、文庫を開こうと夢だった山口さんにと

▲1月8日 福島民友新聞掲載

放課後 元気な声 ♪ ママ友ひと休み

「絵本文庫やまぼうし」はどんなところですか。記事からわかることを抜き出してみましょう。

山口さんが前川さんの後継者となろうと思ったのはどのような思いからですか。

「絵本文庫やまぼうし」のような施設があることは、その地域にとってどんな意味があるでしょうか。
